

平成27年1月22日

スマイルボックスについて

1月20日は大寒でした。暦の上で一番寒い日とされています。大寒は太陽の動き1年分を四季に分け、更にそこから六つに分ける考え方です。北陸・東北地方は大雪になっていますので、全国的に見ればやはり寒いようです。

本日はスマイルボックスについてお話ししたいと思います。

「スマイルボックス」は、クラブによって「ニコニコボックス」ともいい、何か良いことなどあったときに、自主申告によりポケットマネーを入れるもので、元来強制されるものではありませんが、近頃はある程度心積もりの額を予算に組んでいるクラブが多いようです。

スマイルこそ善良の表現です。このスマイルボックスの活用こそ最もロータリーを象徴するものです。

その理由は、このお金はすべて社会奉仕などのクラブ事業として必要だからです。従って、集める側は強制的な感じを与えないように配慮し、喜んで協力してもらえる工夫をして、メンバーも誕生祝い、結婚祝いなど進んで協力するようにしています。

また、失敗したときなども、ペナルティーなどといわないでスマイルボックスへと行って何気なく協力します。金額には決まりはありません。あなたの気持ちの範囲で協力するものです。

それではこのスマイルボックスはどのようにしてできたのでしょうか。

スマイルボックスは、シカゴRCから始まりました。シカゴRCにはCivic Committee(公共問題担当委員会)というのがあり、社会の公共問題を解決する事業を企画立案する委員会でした。Civic Committeeは理事会の承認を得て、クラブ名で行う団体奉仕の社会奉仕事業を決定すると、予算を立てて通常会費の他に会員から強制的に資金を取り立てていました。しかし、自分には関心のないことで徴収されるのはあまり面白くなく、あんな事業をするのならば、自分の方にはもう少しましな事業があるのにと考える会員が出てきました。

1919年、ある青年がシカゴの町で残虐な殺人事件を起こしました。大変な社会的衝撃を与えたので、健全な青少年を育成するために100万ドルの募金をしようじゃないかとCivic Committeeが提唱しました。

ところがシカゴロータリアンはこれに抵抗しました。「ロータリー運動の原点に立ち戻って、ロータリー運動の原理はこうだから、その原理の必然として、これこれの金を出さなければならぬ」ということが分かれば出すこともいとわない。しかし、Civic Committeeで勝手にいろいろなプログラムを決めて、会費に準ずるような形で金ばかり取られるのは承服できない、というものでした。

ロータリーの第一義は一業一会員制をもって選ばれた良質な職業人が、週一回の例会に集まることです。他の良質な職業人と親睦のうちに切磋琢磨、自己研鑽、奉仕の心を育て、その奉

仕の心で、世のため人のために行動することではないのか。お金をいくら出さなければロータリアンではないというようなことは、ロータリー運動の中にはないのではないか。会員が Civic Committee の計画に対して、金を出さなければならない義務はないのだ、という結論に達しました。

そこで例会場の四隅に箱を置き、記念すべきことがあったら、その箱にお金を入れてもらうことにしました。しかし、入れてもよし、入れなくてもよし。入れた者は入れたからといって誇ってはならない。入れない者は恥ずかしいと思っはいけない。こういうルールができたのであります。これがスマイルボックスの起こりで、1924年のことでもあります。

因みに日本で最初にスマイルボックスを設置したのは、大阪ロータリークラブで、昭和11年7月のことでもあります。その内容は、誕生日とか、子供の結婚、孫の入学等の何かのお祝いがあった場合に応分のお金を自発的にいれるという主旨のものでした。

以上がスマイルボックスの始まりです。